HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	物語の受け手によるセリフ発話 ： 参与者間の共感関係の構築に関する会話分析的研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	山本, 真理
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第11428号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55308
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Mari_Yamamoto_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：山　本　真　理

学位論文題名

物語の受け手によるセリフ発話

―参与者間の共感関係の構築に関する会話分析的研究―

本研究では、物語の語りにおいて参与者が行う、物語の登場人物の声として聞かれる発話を「セリフ発話」と呼ぶ。そのうち物語の内容を知らないはずの「受け手」が「セリフ発話」で参入する現象に焦点を当て、これらが物語を語る活動においてどのような機能を果たしているのかを会話分析（Conversation Analysis）の立場から分析する。

本研究で扱う現象は、従来の引用研究の枠組みの中では「直接引用」として扱われていた現象と重なる部分もある。しかし、本研究ではあえて引用研究の枠組みから切り離すことによって、次に述べる現象の諸特徴を捉えることができた。まず、語りの「受け手」が行う発話に注目することができた。これは、従来の文単位で現象を見るのでは捉えることができない重要な発話の特徴である。また、語りの内容を知らないはずの受け手の発話に注目することにより、発話者が必ずしも過去に行われた（であろう）「元発話」を参照し、それを「再現」「模倣」しているわけではないことがわかった。このことは、従来の引用研究の多くが、引用を行う際に前提としていた引用の定義が必ずしも実際の現象には当てはまらないことを示している。更に、従来の引用研究において「非典型的」とされていた発話末の「みたいな」を伴う発話や、形式を伴わないセリフ発話が単独で用いられる現象を含めて扱うことができた。これらの発話の特徴を捉えた上で、以下の三つの課題に取り組んだ。

第一に、物語を語る・受けるという活動において、「受け手によるセリフ発話はどのような機能を果たしているのか」という課題について検討した。セリフ発話による受け手の参入は、これまで談話論において話者の「共感を示す」（砂川 2003）と感覚的な記述に留まっていた。それに対し、本研究では、会話の連鎖構造の中で

セリフ発話が置かれる位置と形式を丁寧に記述した。その際、受け手は、語り手の発話だけではなく、身体的動作を含めた語り手が利用可能な様々なリソースに敏感に反応することにより、適切な参入を実現していることを明らかにした。このことは、受け手のセリフ発話が極めて的確に語り手の物語を理解していることを示す一つの方法となっていることを示している。そして、従来「共感」ということばで表されていた当該現象が、受け手の実際の振る舞いを通した観察可能な現象であることを経験的に示すことができた。

第二に、セリフ発話が伴う「みたいな」という形式の「相互行為上の機能は何か」という課題に取り組んだ。ここでは、まず初めに課題１で明らかになった受け手の貢献が、語り手と受け手双方の参加の組織化に関する絶妙なバランスの維持に志向し、協働的になされていることを指摘した。そして、それは語り手が発話の組み立てや身体的動作を用いて物語の一部を「可視化」することによって、可能になっていた。「可視化」とは、語り手が演技的な発話や身体的動作を用いることによって、語り手自身の個人的な経験を語るという、「語り手の内部に閉じた活動」を、受け手にも取り扱い可能なものとしてその場に提示することである。そうした環境において、受け手は、語り手の立場に配慮を示しながらあくまでも物語の「受け手」として振る舞うことを実現していた。こうした、お互いの参加の調整の過程は、セリフ発話という物語を「語る―受ける」という権利関係という観点から考えるとそのバランスを崩す可能性を孕む参入の仕方に対する一種の対処として見ることができる。そうしたバランス関係の維持の際に、語り手・受け手双方が用いる発話末の「みたいな」という形式が、有効に利用されていることがわかった。その利用について、本研究では、従来の「みたいな」に関する言語学的な意味機能の記述が、実際の相互行為においてどのように機能しているのかという観点から示すことができた。このような言語形式の相互行為上の機能に関する記述は、これまでの言語学的な記述の意義や妥当性を相互行為の観点から再検討することにもなった。

第三に、出来事を冗談として語る環境や、不満を（冗談として）語るといった特定の環境の中で、「セリフ発話やそこから開始される連鎖が、相互行為上、特にどのような機能を果たしているのか」という課題に取り組んだ。それぞれの環境の中で、受け手は、単に語り手の語りの内容に対する強い「理解」を示すだけではなく、語り手が報告する出来事に対する態度に対する強い「同調」も示すこととなっていることがわかった。そして、そうした受け手の反応を更に語り手が受け止めることによって、セリフ発話によって、単に受け手が共感を示しているだけではなく、ある事例においては、語り手と受け手が互いに「同じ気持ち」であることを示し合い、「共感し合う」ことがやり取りを通して経験されていることが明らかになった。そ

れは、例えば、笑うべきものとして語られた物語に対し、今度は受け手のほうからセリフ発話を用いて、その笑うべき焦点をより強めた形で提示する。それにより、その場の相互行為の中で新たな笑いが産み出され、参与者全員で同時に笑う新たな機会が訪れる。更に、そのことは、語り手が語るに値する面白いことが語られたことが、受け手の反応を通して示される一つの方法となりうる。これにより、セリフ発話によってなされていることが「共感が示されている」とだけ指摘されてきたこれまでの研究に対し、具体的なデータに基づき、なぜそのように我々が感じるのか、そして、そうした受け手の反応が、その後の連鎖上どのような機能を果たしているのかを記述的に示すことができた。

更に、本研究では、不満を語る場面におけるセリフ発話の形式的特徴と、そこでなされていることについても記述した。特に、不満を語る場面においては、「みたいな」を伴わず、セリフ発話が単独で用いられる現象が見られる。こうした現象は、従来の言語学の視点では、抽出することのできなかったものである。本研究では、不満を語るという連鎖の中のどの位置にセリフ発話が単独で用いられるのかを記述することによって、「みたいな」という形式が単に「脱落している」のではなく、あえて形式を伴わないことによって、不満を語るという活動の中で、受け手が「さりげなく」語り手に「同じ気持ちである」ことを示す一つの手段をなっていることが示された。

以上の課題に取り組むことによって、本研究全体を通して、「受け手」が単に物語を聞いて理解するだけの受け身の存在ではないことが示された。このことによって、従来、会話の中で常に受け身の存在として語られてきた聞き手観に対し、いかに会話の中で積極的に貢献を果たすものであるかが明らかになった。更に、本研究は、会話分析の一連の研究が注目してきたように、会話のやり取り自体が、話し手一人に関わるものではなく、参与者らの協力の元で相互行為的に為される一つの証拠としても位置づけられる。